



無邪気なうり坊たち

観察の帰路、山道を下っていると50mほど下から4頭の仔イノシシが近づいてきた。先方はこちらの姿に全く気が付かずどんどん近づいてくる。10mほどの距離になった時に、靴で地面を踏み鳴らし驚かすと大慌てで一目散に茂みに逃げ込んだ。

撮影者/横田 靖

撮影場所/池田市伏尾町 (2014.6.13)



モミジカラスウリ

カラスウリは夜の妖精だが、こちらは日中でも咲き続けるので、さながら真昼の妖精。

撮影者/古川 末広

撮影場所/金剛山 (2014.6.30)

山歩の愉しみ 6 中池見湿地

文・写真 たなか よしゆき



こぼれびの道からビジターセンターと中池見湿地をみる (2013.9.7)

表紙は天筒城跡への道から中池見湿地を見る (2013.9.7)

私と中池見湿地との紐帯は、親友の故斎藤慎一郎さん(クモ博士。クモクモ仙人の綽名を持つ)が結んでくれたものである。「中池見湿地トラスト」(1996年)時代からの結びつきである。と言っても大した活動は何もしていない。会員になり、運動を見守り、ささやかに支援しつつだけである。中池見湿地は2012年7月、ラムサール条約登録地に認定され、現在、その保護保全活動は世界から注目を集めている。中池見湿地のある敦賀へはJR新快速が走るようになり大阪からの足も約2時間とずい分便利になった。よっしゃ、久しぶりに出かけてみよか。おまけに青春18切符という秘密兵器が1枚残っている。

訪れた日はあいにくの雨で、1日中降りも強かった。山小屋のような風格のあるビジターセンターで地図をもらい、話を聞いてから傘をさしながら湿地を巡り歩いた。「クモクモ仙人の泉」と命名された自噴水のあるところで、なつかしい斎藤さんを想った。

中池見湿地=奇跡の泥炭湿地と呼ばれ、50万年の記憶を持っている。江戸時代、新田開発されるまでは樹齢2000年の杉が繁る沼地であった。戦後、水田は放棄され、工業団地計画などが持ち上がったがそれらを乗り越え、現在は「人と自然のふれあいの里」として親しまれている。

Tomorrow



ブナ愛樹クラブのみなさん(筆者は後列の左端)

生物多様性保全の現場から 6 和泉葛城山のブナ林を次世代に!!

文・写真 弘田 純(和泉葛城山 ブナ愛樹クラブ会長)

ブナは、九州鹿児島県高隈山から北海道南部黒松内までほぼ日本全国に分布しています。通称、ブナ帯と呼ばれる、冷温帯落葉樹林帯に生息する樹木で、垂直分布をみると年平均気温3.5~12.0℃の範囲にあり、中部地方以南では、標高800~1,800mの間に生息しています。

和泉葛城山ブナ林は、大正12年(1922年)国の天然記念物に指定され、その時には、8haの区域に直径30cm以上のブナが1800本有ったと言われていました。和泉葛城山のブナは、標高650~頂上858mの間にあり、塔原道の尾根部分に多くみられ、和泉葛城山北側斜面(大阪側)の標高750m以上に全体の80%程度が生息しております。また、大阪周辺のブナ林は、金剛山、大和葛城山、能勢妙見山、岩湧山などにあります。

現在、和泉葛城山のブナは大木の倒木、枯死などの増加とともに、世代更新等が行える後継樹のブナ若木の減少もあり、和泉葛城山のブナ林の存続に危機感を感じています。現在、天然記念物区域(コアゾーン)には、稚樹を含め約500本、全体(バッファゾーン:緩衝森林区域を含め)で約850本が生育しています。和泉葛城山に日本で4番目に大きなブナがありましたが、平成13年に枯れました。また、登山道を歩いているだけで20本程のブナの倒木、枯れ木が見かけられます。このような状況の中、バッファゾーンには約2,500本のブナが植樹され、下草刈りなどの保全活動が行われています。

ブナは約7年に一度しか豊作はありません。

平成5年は豊作で、多数の種を採取いたしました。平成12年は地球温暖化の影響などと言われてはいますが、しいな、虫害などでほとんど種が採取できていません。次に平成18年に7,000個の種が採れ、300本の苗が生え、延べ160本程を移植中です。また、去年は多数の花が咲きました。余り豊作と思いませんでしたが、現在、塔原道、牛滝道横に100本程が発芽しているのが確認できます。

ブナは、木偏に「無」と書いて“撫”(ブナ)と読みます。ブナは木材としては役に立たないことから作られた文字だと言います。今は、ブナは保水力など、その森が持つ様々な機能が見直され、東北・白神山地の原生林が世界文化遺産に指定されるなどして一般の関心を集める木の代表格になりました。

「子供は自然の中で群れて遊んで学ぶ!」ことが大切であると、元モンキーセンター館長、河合雅雄先生も言われています。私の子どもの頃は、学校が終わると日暮まで山や川、海に出て遊んでいました。子どもの健全な成長には、豊かな自然に包まれ、家族を中心として、学校と地域が緊密に連携しあい、大人の温かいまなざしの中で育てること大切であり、このような地域コミュニティの広がりの中から、子どもたちが里山の保全活動にも参加するようになります。このような状況を進めることにより、「和泉葛城山のブナ林が次世代に!」引き継がれるよう望みます。

インスト18期の山條さんはブナ愛樹クラブの会員さんです。この原稿は山條さんから弘田会長に依頼していただきました。なお、ブナ愛樹クラブは、公益財団法人大阪みどりのトラスト協会のメンバーです。